

広告

ザ・シンポジウムみなとin小樽

今年で開港120周年を迎えた小樽港の歴史や現状、将来像などを考える「ザ・シンポジウムみなとin小樽」(北海道経済連合会などによる実行委員会主催)が11月27日に小樽市内の小樽市民センターマリノホールで開かれた。約400人の市民が参加。小樽市総合博物館の石川直章館長が基調講演で小樽港の歩みと日本の近代化の中で果たした役割を紹介し、パネリストがシンポジウムでは地元経済界や今後の期待を語り合った。

◆基調講演

小樽市総合博物館館長

石川直章氏

◆パネリスト

小樽市長

迫俊哉氏

北海道商科大学教授

田村亨氏

北海道港運協会小樽支部支部長

大田秀樹氏

商船三井客船営業グループ課長代理

富田瑞穂氏

小樽商工会議所女性会副会長

小笠原眞結美氏

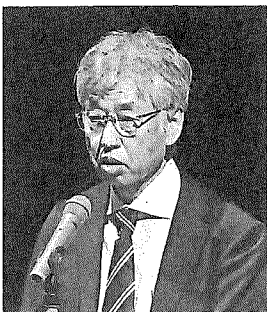
◆コーディネーター

小樽商科大学教授

李濟民氏

日本の「近代化」運んだ港

基調講演 石川直章氏

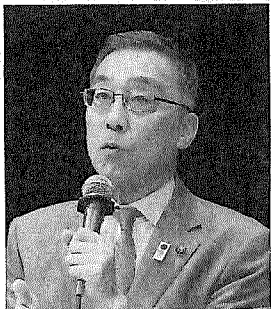


いしかわ・なおあき 専門は考古学・文化史学。2013年には日本博物館協会活動奨励賞を受賞した。

小樽を物語る時に「港」というキーワードを外して語ることができません。作家の小林多喜二は小樽のことをこう書きました。「広大な北海道の奥地から集まってきた物資が、ここからまた内地に出ていく。開拓は北海道の『心臓』みたいな都会である」と。小樽港が果たしてきた役割を端的に表した言葉です。一方で明治時代には北海道の「近代化」を担った移民の多くが小樽港に上陸し、ここから北海道生活の第一歩を踏み出していきました。1869年(明治2年)に小樽港に「海關所」が開設され、以後は蝦夷地に商船が自由航行できるようになって、小樽にもたくさんの船がやってきました。明治以降、小樽港が担った大きな役割の一つが石炭の搬出です。空知の幌内炭鉱から小樽や室蘭へ鉄道で運ばれ、そこから船で本州へ運

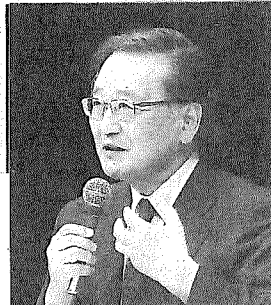
いるのは全国でも小樽だけです。さるにも一つ、小樽港は「港の近代化」を全国に運んだ港でもあります。国内初の外洋防波堤である小樽港の外洋防波堤を大井勇が1908年(明治41年)に完成させて以後、近代的な外洋防波堤が全国、全国に造られました。大井先生が育てた弟子たちは国内各地や台湾、パナマ運河でも築港に携わりました。100年を越えて小樽港は、100年を越えて小樽港を造っただけではありません。この間に、大井先生はそれと終わりとせず、100年後にも強度を検証するテストコースを残された。100年以上にわたるコンクリートの劣化データを保持しているのは、世界でも小樽だけです。

人と物 行き交う小樽に



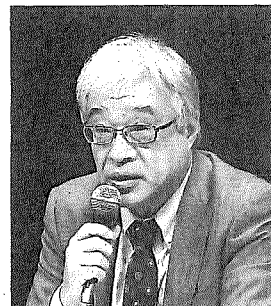
迫 俊哉氏

はざま・としや 1982年に小樽市役所に入庁。総務部長などを経て、2018年から市長。現在1期目。



田村 亨氏

たむら・とおる 専門は交通工学。室蘭工大学教授、北大大学院教授などを経て2017年から現職。



大田 秀樹氏

おおた・ひでき 港湾・倉庫業のノーススター・トランスポート社長。北海道港運協会副会長も務めている。

李 小樽港の100年を越す歴史を踏まえ、これからどう発展させていけば良いかという課題を考えていきたいと思いを語りました。

迫 小樽港は日本海に面し、対岸諸国との貿易に有利な場所にある天然の良港です。臨港地区は高速道路や鉄道などのアクセスが良く、国内の輸送拠点として重要な役割を担っています。クルーズ船も入港し、「船客万来」で多様な船舶の利用があります。一方で近年は港の水深不足で積載量を減らす大型船が出ていること、コンテナ置き場やロイヤル貨物船の利用が壁が分散して効率的でないことなどが課題です。

大田 私の会社は海から荷物を揚げて配送まで港運に関わる事業をしています。小樽港でも外航コンテナ船の荷役などをしていますが、北海道全体の課題として輸入貨物に比べ輸出貨物が極端に少ない。極東ロシアとの貿易は小樽港が全道の8割を占めますが、中古車の輸出や水産物の輸出入が減り、影響を受けている。小樽港で扱った一般貨物を増やすことが、物流企業の経営基盤を支え港機能の強化にもつながります。

田村 私の会社はクルーズ船に「飛ばし」を運航し、小樽港では「飛んでクルーズ」北海道という空路と結んだ企画が行っています。既存の交通機関では行きにくい利尻・礼文と知床を3泊4日で巡るルートで人気が高く、これまで約2万人が乗船しました。船会社から見た小樽港の最大の魅力は新千歳空港からのアクセスの良さ。小樽駅から港

3号ふ頭をクルーズ船の拠点にして、より機能的な港港に再編整備していくことは考えたい。ターミナル機能の整備を進めたいと思っています。もちろん、物流も港の柱ですから、対岸貿易の振興もしっかりやっていきたい。

田村 おそらく100年後には日本海中心の社会が生まれます。そのための先手をしっかりと打つことが大事だと思います。最近の若い人たちは自宅、職場以外の3つ目の場所「サードプレイス」が求められている。そういう場所を港につくれば、市民と世界中の旅行者との交流の場になる可能性もある。

新幹線と船つなぐ試みも

日本海時代への先手打て

石狩湾新港と連携を強化

乗船客の待機スペースを

市民も親しめる「巷」に

小笠原

富田

大田

田村

迫

小笠原

富田

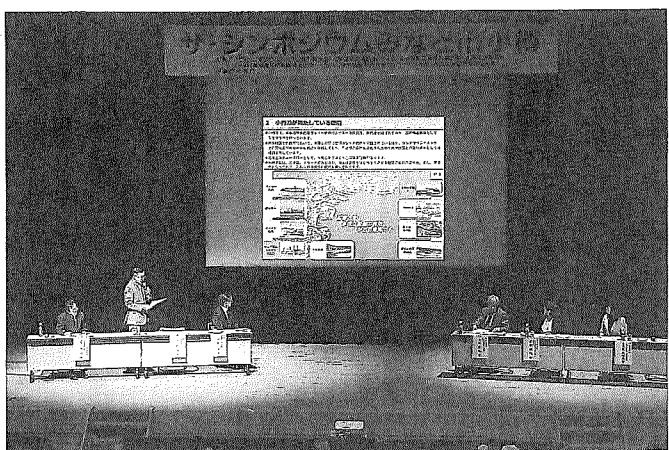
大田

田村

迫

小笠原

富田



市民400人が参加し、小樽港の歴史や将来を語り合ったシンポジウム



富田 瑞穂氏 とみた・みずほ 大学卒業後、商船三井客船に入社。レジャークルーズの企画・販売などに当たっている。



小笠原 眞結美氏 おがさわら・まゆみ 企画会社オー・プラン代表取締役の傍ら、女性の起業支援活動にも取り組む。



李 濟民氏 リ・ジェミン 専門は経営戦略・国際経営。小樽商大では産学官連携推進に携わっている。韓国出身。

向かう景観も魅力です。小笠原 小樽商工会議所は小樽港のあり方を考えるプロジェクトで第3号ふ頭基盤部と周辺地域を観光資源として活用する方針などを考えてきました。ふ頭周辺の魅力を市民に知ってもらうため、コンテナを利用したカフェや雑貨店、バルも実施しました。小樽港は物流港であると同時にマリナーなどもあり、観光船も発着しています。近くに運河という一大観光スポットもあり、人の交流や観光の拠点として活用していく必要があると考えています。

田村 港に求められる多様な機能を実現するため、かつては「ハコ物」をつくることに対応してきました。施設づくりも重要ですが、今は課題を解決するアイデアと行動が問われています。

迫 市内の中心部に近い第3号ふ頭をクルーズ船の拠点にして、より機能的な港港に再編整備していくことは考えたい。ターミナル機能の整備を進めたいと思っています。もちろん、物流も港の柱ですから、対岸貿易の振興もしっかりやっていきたい。

田村 おそらく100年後には日本海中心の社会が生まれます。そのための先手をしっかりと打つことが大事だと思います。最近の若い人たちは自宅、職場以外の3つ目の場所「サードプレイス」が求められている。そういう場所を港につくれば、市民と世界中の旅行者との交流の場になる可能性もある。

問い合わせ先 ザ・シンポジウムみなと実行委員会事務局 (社) 室蘭港湾技術センター(担) 総務部 TEL (011) 747-1000